

# 經濟論叢

第七十七卷 第六號

---

- 家族型農場の理論……………山岡亮一 1
- C. I. F. 価格の巨視分析 (二) ……………佐波宣平 19
- ブルック・ファーム……………穂積文雄 30
- プロイセン絶対主義の鉱業政策と  
オーベル・シユレージエン鉱山業  
……………肥前栄一 52
- 

昭和三十六年六月

京都大學經濟學會

## ブルック・ファーム

穂積 文雄

## 六

わたくしは、これまで、ブルック・ファームがいかにしてなりたつたかについて、すこしくのべるところがあった。<sup>1)</sup> それでは、そのようにしてなりたつたブルック・ファームは、その後、どのようなあゆみをたどつたであろうか。わたくしは、これから、しばらく、それについて、かたるであろう。

ブルック・ファームは、みづから、ブルック・ファーム農業・教育組合となる。それは、すでにあきらかにしたところのごとくである。<sup>2)</sup> まことに、ブルック・ファームのしごとは、この二つの事業にかざられたといつてよい。まさに、その名のとおりであった。そして、それらの事業において、ブルック・ファームが失敗したとはいえない。それは順調なあゆみをたどつたようにみえる。そのことはリプレイが一八四一年二月一七日エマーソンにあてて、つぎのごとくかいているのをみても、うなづけるであろう。

.....  
われわれは、いまや、労働者・教師および学生よりなる一つの家族となつて、さかんに、活動しているところです。われわれ

の生活様式は真実のものであり、いかなる誘引があつても、われわれのうちのたれひとりとして、これをすてて、われわれが最近すててきたばかりの生活様式にたちかえるものはない、と確信しています。たくいまれな神のめぐみ(A rare Providence)が、ここにあつめられた事物の上に、ほほえみをつづけておるようにおもわれます。そして、とても多くの力が、われわれとともに、われわれのために、はたらいております。ですから、現在まだあきらかにせられていない社会生活の諸法則(some of the laws of social life)を顕示することに成功する運命を、われわれはにやうにしているということを、わたくしはうたがうことができせん。われわれ、ここにあるものは、みんな、よろこびと希望にみちています。われわれは大きな障害にうちかかってきました。われわれの基礎は賢明におかれました。わたくしは、そう信じています。成功の要素はみなそなわっています。わたくしには、そうみえます。

もつとも、これは、リブレイがエマースンに支援を乞うたためにかいたものである。そのことをあたまたまにおいてよまねばならないとおもう。そうすると、ここには多少の誇張があるであろうことを推定することをさまたげないであろう。いな、そう推定しなければならぬといつてさえよいであろう。それにしても、万事は進行していった。それは事実である。そこには、その前途を悲観せしめるに足るほどの大きな悪材料としてとりあげられるものは、かならずしも、みいだがたい。それはそのとおりである。そのことに、しいて、うたがいをさしはさむ余地はない。そういつて、よいであろう。げんに、エリザベス・ビーボディ女史も、さきに引いたダイヤルへの寄稿<sup>4)</sup>のところで、このうへに、

とおくにいるひとのなかには、このコミュニニチーの事業がどれだけすすんでいるか、と、たづねたいとおもっているひともある。それに対して、われわれは、精確にこたえることはできない。そのわけは、われわれはこのアッソシエーションの機関として(as organs of this association)かいていゝのではないし、それに、また、もし、われわれが、かれらに情報(informa-

ton)をもとめても、かれらの名聞がいから (out of their dislike to appear in public) かれらはそれをしりぞけるであらうとかんがえられる (have reason to feel) からである。このことは、よくしてなごめておいたところである。だが、つぎの二とくどう権利はあるとせむラウ (But we can see, and think we have a right to say……)。それは農場を購入した。組合員の一部のものが、その農場を、一年間、かれらの農業への愛情と農業の伎倆とをかたむけて耕作した。そして、それは成功であった。―かれらは、いまのところ、家は一軒しかない。その一軒の家にあつまつて一つの家族を構成している。その中には寄宿学生も若干名いる。つぎに、みんな、いっしょにはたつき、いっしょにまなんでいる。……

そこに、われわれは、なんら、このコンミュニチーの失敗をおもわしめるにたるものを、みいだすことはない。そういつてよいであろう。また、一八四三年七月三〇日、チャールス・レーン (Charles Lane) は、したしくブルック・ファームをおとづれたあとで、つぎのごとく書いている。

ノーサンプトン・コンミュニチー (The Northampton community) は産業のコンミュニチー (one of industry) である。ホーブデルにあるもの (the one at Hopedale) は実践的神学 (practical theology) をめざしてゐる。ロックスブリーのはこれは趣味のもの (one of taste) である。それにしても、それは、ここにあつてもよいものである。そして、おそらく、われわれは、いわねばならないであろう、それは存在しうるもつともよいものである。と。

こうみてくると、たしかに、ブルック・ファームは順調なあゆみをつづけていたようである。それはみとめなければならぬとおもう。そして、ブルック・ファームが順調なあゆみをつづけていたということは、ただ、このようなことばがしめしているだけではない。事実が、また、そのことをうらがきしている、といつてよい。家は一軒から四軒にふえる。一八四二年正月のダイアルに、ピーボディ女史が、「かれらは、いまのところ、家は一軒しか

ない」とかいていることはききに引いたところであるが、一八四三年七月二五日、当時、ここにまなんでいた女学生ソフィヤ・イーストマン (Sophia Eastman) がきようだいであるメヒタブル・イーストマン (Mehitable Eastman) にかきおくれた手紙には、すでに、つぎのごとくかかれていたのを見ることが出来る。

……独立したたて、ものが四軒あります (There are four separate buildings)。ビルグリム・ハウス、フライリー、コッチェジ、および、ハイフ。……<sup>7)</sup>

そして、ふえたのはたても、ばかりではない。ひともふえた。一八一四年にはまだ一軒の家にはいれるほどのコンミニチーであった。そうピーボディ女史はいつている。それが、一八四二年に入つてのち、ブルック・ファームのなかまのひとりであるジョージアンナ・ブルース (Georgiana Bruce) から、ボストンにすむそのともサラ・エデス・フレン (Sarah Edes Allen) によせられた手紙の中に、われわれは、すでに、つぎのごとくかかれていたのを見ることが出来る。

われわれは、いま、そのかず六〇人をこえています。そして、さらに、教名がくることになっていきます。……<sup>8)</sup>  
また、さきに引いた、一八四三年七月三〇日チャールス・レーン (Charles Lane) のかいた手紙の中に、われわれは、つぎのごとくかかれていたのを見ることが出来る。

……ある晩、ロックスベリーに行った。そこには八〇人、ないし、九〇人のひとがいた。……  
さらに、おなじチャールス・レーンは一八四四年一月のダイヤルには、また、こうかいてもいる。

いま、そこには約七〇人のひとがあつまっている。その中、約三〇人は修学のためにおくられてきていること、もたちである。おとなも若干名おつて、主として、知能の啓発 (Mental assistance) にあたっている。そして、この社会には、夫婦ものは

(married couples) 四組いるだけである。……<sup>10)</sup>

さらに、われわれは、つぎのごとく、つけたしておくことができる。すなわち、一八四一年の秋、九月二十九日、定款作成の際の署名者は、一〇名であったが、一八四四年一月一八日の改正された定款に、署名したものは、実に七三人におよんでいる、と。<sup>12)</sup>

われわれは、リブレイが一八四〇年の秋十一月九日ブルック・ファームの構想を開陳し、その中で、つぎのごとく述べたことをしっている。

われわれは現在のところ、三・四の家族が、来年の四月のはじめに、引越し、農場の耕作と家屋の建築にあたり、秋には、さらに、できるだけ多くのひとを受け入れる準備をなし、かくてインスタレーションを、ともかく、実行に入ることができるかぎりの簡素なしかたで、また、最小の人数で、開始するつもりでいます。だから参加希望者全部を把握するのは、すくなくとも二・三年後のことになりましょう。われわれは、みずからのおもみによって崩解してはなりません。われわれは徐々に成長してつよくならなければなりません。……<sup>13)</sup>

また、エリザベス・ビーボディ女史が、さきに引いた論説をさらに、つぎのごとく、むすんでいることを指摘することもできる。

……住居を拡大することができしだい、同志のひとびとを募集するために、かれらは、こころざしをおなじくし、来り加わろうとするすべてのひとびとを、しることを、よろこぶものである。<sup>14)</sup>

そして、たゞものはふえたのである。ひともしもふえたのである。しかも、リブレイのはじめに予想したとおりの速

度においてふえたといつてもよいようにおもわれるのである。それなら、そのかぎりにおいては、このコミュニティーは順調なあゆみをつづけたといわなければならないであろう。それはひとめなければならぬ。それをいなむわけにはいかないであろう。

そういうば、それは、たしかに、そのとおりである。それにまちがいはない。しかしながら、それは盾の一面である。われわれは盾の一面をみるのみに、おわつてはならない。われわれは盾の他の面をみることをしらねばならない。ひかりのあるところにはかげがともなう。われわれはひかりに眩惑せられるのあまり、そのかげをわすれるわけにはいかない。それでは盾の他の面にわれわれは、はたして、なにをみるであろうか。ひかりは、そもそも、いかなるかげをおとすのであろうか。わたくしは、以下、しばらく、それについてうかがうところあるであろう。

われわれはブルック・ファームにたてものがふえたのをみた。われわれは、それにおいて、このコミュニティーの順調なあゆみの象徴をみた。しかしながら、そうてばなしによるこんでばかりいるわけにはいかなないのである。それはなぜか。おもうに、たてもものをつくるには、かねがいる。そのことはコミュニティーの財政への重圧でなければならぬ。しかるに、およそ、このようなコミュニティーにおいて、財政はもつとも重大な問題である。多くのコミュニティーにおいて、ひとびとがもつともあたまをなやましたものこそはこの財政の問題であった。そして多くのコミュニティーがたおれたのは、ほかならぬ財政の破綻に基因した。実に財政問題はコミュニティーの死命を制するものといつてよい。死活の問題といつてよい。そして、それは、ブルック・ファームをのみ例外とするものではない。そのことは、のちにいたって、いっそうあきらかとなるはずである。

われわれはブルック・ファームにひとがふえたのをみた。われわれは、それを、このコミュニティーが順調なあ

ゆみをつづけている証左とみた。しかしながら、ただそれにとどまるのでは、それはあまりみかたにすぎぬとのせしりをまぬがれることができないことになろう。それはなぜか。つぎの諸事情がそれをあまりにするであらう。

ひとがふえたというとき、それは量の問題である。ところが、ひとは量ばかりが問題ではない。質も問題である。ひな、質がいつそう重要な問題である。そういつてさえ、よいのではあるまいか。それでは、この場合、質の面からみると、どうなるか。それをうかがはねばならない。そして、それにはさきにも引いたチャールス・レーンが一八四四年一月ダイヤルにかいた文に、きわめて有益なものがある。だから、それによるう。かれは、こううっている。……ひとびとをそこにこさせた動機は、いろいろである。それはかれらのかずどもあらず( may be as various as their numbers )。事実、現在すんでいるひとは三つのことになった階級にわけられる。

……おとなのなかまの主たる部分には、その存在がこの世帯 (household) だも、とても大きな特徴と友愛の気風 (the fraternal tone) をあたえるひとたちであるが、かれらは、存在の改善せられたる状態 (an improved state of existence) はアマンション内において発展させられるものであると信じ、それゆえに、アマンションの推進に熱心である。いま一つの階級は、社会から落伍して来たもので、したがって、じぶんたちの状態をよくしようという目的で参加するものより、なりたっている。第三の部分は、かれら自身の啓発と勉強 (their own development and education) を目的とするものから、なっている。……

だから、かれは、

……過半数ということをかんがえると、共同善のための自己犠牲 (self-sacrifice for the common good) に賛成して票を投ずるということはあまりおこなわれそうもない。……

とかんがえる。そして、つぎのごとき嘆声を発するのである。



コンミニニチーの原理によつてあつたのではないひとびとのあつまりは、日常生活(ordinary life)におけるいくたの不都合や、このような事情における特殊なわずらいをまぬがれないものである。ところで、ブルック・ファームは現在そのようなインスチューションである。それは一つのコンミニニチーではない。それは、ほんとうは、一つのアッソシエーションではない。それは、単なるひとびとのあつまり、であるにすぎない。そして、それは、それを、人類にとつて、ふかく、かつ、ながく、価値あるものとするに、おそらく、なくてはならないとおもわれるところの、精神の一致を、欠いている。三年もたっているのに、教育を主とするインスチューションとするか、産業を主とするインスチューションとするか、それとも、両者を結合したものにすべきかの決定さえ、きまっていないように、おもわれる。……

もつとも、かれは、教育については、その優秀なことを、ほめたたえて、つぎのごとくいつている。

教育においては、ブルック・ファームはよその施設よりはるかに大きな自由があたえられているようにおもわれる。指導は、より情がこもつており、したがって、その効果には、よりむねにしむものがある。おさない学童も、年のいった学生も完全にとはいかなくとも、たいては、愛の力で抱擁せられている。この点においては、ブルック・ファームは、ニュー・イングランドのよくはめられる学校の、一つの、非常に改善せられた・ひながたとなるものである。いまや、前者における模倣・机上学問の体制は、なんらかの・思考の獨創性および精神の生得の力(originality of thought, and the native energy of mind)を刺戟するように・よりよく考慮せられた・案によつて、とつてかわられるか、あるいは、自由化せられるか、しなければならぬときである。よりふかい愛情(sympathy of heart)も、また、わすれてはならないところである。しかしながら、これらのことの発芽はきびしい雇用制度の下ではもとむべくもない。だから、ブルック・ファームはその自然的な教師によつて一つの真に「自由な学園」(free school)の異常な・喝采をうける・条件を提供するものということになる。

しかし、そこにあつまる生徒の素質はどうか。それについて、われわれは、ここで、かれからは、なにもきくこ

とができる。だが、われわれは、ソフィヤ・イーストマンがさきにひいた手紙(6)の中で、つぎのごとくいうのをきくことができる。

……あなたは、このコンミニチーの計画が、洗練にたへ、非常に文学を愛好し、かつ、すぐれた素質をもつものでなければ、うけない、といっていることを、しっぺいらっしやるでしょう。ところが、そうでないひとが、とても、たくさん、いるのよ。それは、たしかなことよ。ほんとのところは、かれらは、どちらかといえば、のちまで、学問はおくれているわ。そのなかには、いつまでたってもどうにもならないだろうとしか、おもえないひと、あつてよ。もつとも、きれいな婦人や紳士や中崩を得たひとたくさんいるにはいるわ。たしかに、そう、おもつてよ。(もつとも、わたしは、みかけ (looks and appearances) だけからいっているのよ。)

それでも、ひとは、こういうかもしれない。素質のよいものは、ほおつておいてもよくなる。素質のわるいものをよくするところにこそ教育のレーゾン・デエトルがある。そこに教育の効果があるのだ。そしてその場合、よりよい教育施設はよりよい効果をあげるのではないかと。それは、そのとおりであろう。わたしは、いま、それについてとやかくいおうとはおもわない。それにしても、それなら、このコンミニチーがよい素質のものしかうけない、いれないというのは、どんなものであるか。それはともかく、すくなくとも、よい素質のものしかうけない、いれない以上は、そこにうけいれられたるものが、ここにソフィヤ・イーストマンが評するようなものであるということだが、ブルック・ファームにとつて、けつして、よろこばしいことではない、ということだけは、たしかなことではなければならない。いくらひとかすがふえたからといって、それで、このコンミニチーが順調なあゆみをつづけている、ということには、ならないであろう。そのことはいなみよふところであろう。しかも、ソフィヤ・

イーストマン嬢は、さらに、ことばをつづけて、つぎのように、いつておるのである。だから、それは、なおさらのことといわねばならないであろう。

……ここでの利益は想像していたほどよいものではないわ。また、どこかよその学校におけるほどの進歩がここで得られるとは、わたしには、かんがえられないことよ。……<sup>17)</sup>

しかしながら、ただひとりの、しかも少女のことばだけで、ことをかたずけてしまうのは、いささか、軽卒のそしりをまぬがれぬかもしれない。そこで、さらに、他の引用をつけくわえよう。アーサー・サムナーというひとが一八九四年「一少年のブルック・ファーム回想」という一文を「ニューイングランド・マガジン」によせているが、そのなかで、かれはこういつている。

……わたくしは学生のひとりであった。そして、わたくしは、ほとんど勉強をしなかった。それは、わたくしみずからのつみであった。わたくしは、わたくしの怠惰を後悔したことは、けっして、ない。野原や川辺で、とても、いそがしくて、勉強などできなかったのだ。……

もちろん、だからといって、わたくしは、学生のみながみな、そうだった、と、いおうとするつもりはない。げんに、ブルック・ファーム時代を回想して、つぎのごとくいつているものもあるくらいであることを、わたくしは、いつている。

ブルック・ファームは一つの連帯・一定の原理を實踐し、一定の結果を達成する目的をもって結成された一つの団体であった。それで、この運動の精神にとけこみ、その偉業の遂行を支持することのできるひとだけがぞまれた。社会改革(reform)

social)の仕事を援助せず、邪魔となり、そして妨害するひとは容れられることができなかった。学校もコミュニティと同様であった。学校は一つの独立の組織であった。しかし、おなじく、実験のための組織であつて、事実上、産業教育開始の最初のころのみであり、そのような教育に適した生徒だけがもとめられた。それは意思薄弱意志薄弱なもの、気力精神力のないもの、または、ザ・イとをきかないもの、のためにはなく、一定の目的を志向する指導にこたえる能力のある・あがるい、こどもたちのためインコンピテンツのところであつた。先生がたは、これらのえらばれた課程に熱心に献身され、無能なものにその時間と注意を提供することはできなかつた。……

しかし、だからといって、わたくしは、わたくしの論旨があらためられなければならない、とは、おもわない。わたくしは、あえて、そういうであらう。わたくしが、そういうとき、わたくしは、これは、とおいむかしのおもいである、ときはすべてをうつくしいものにする、むかしはなつかしいものである、おもいではあまいものである、だから、この回想にあまりおもきをおくにおよばない、などと、いおうとするものではない。わたくしのいおうとするところは、こうである。たとえ、この回想をそのままに、うけとるとしても、ブルック・ファームの学園にあつまったもののなかに、さがおとれるもの、あるいは、学園にとってこのましからぬはずのものが、いた、ということ、しかも、そのようなものが、すくなくなかつた、ということが、なくなることに、かならずしも、ならない。そして、そればかりではない。そのことは、この回想をそのままにうけとるとき、かえつて、ブルック・ファームに暗影を投ずるものでなければならぬであらう。

こうみてくると、ひとがふえたということからだだちに、ブルック・ファームが順調なあゆみをつづけていたと断ずるのはどうであらうか。しかも、この問題は、まだ、これでおわらない。わたくしは、さらに考察をすすめる

ければならない。

これまでは、わたくしは、ひとがふえたということ为前提として、ものをいつてきた。ひとが、出て行くということについては、なんら、ふれるところがなかった。それでは、出て行くひとはいなかったのであろうか。リブレイは、さきに引いたところのみられるとおり、

いかなる誘引があっても、われわれのうちたれひとりとして、これをすてて、われわれが最近すててきたばかりの生活様式にたちかえるものはない、と確信しています。

と、いった。これも、おなじく、さきに引いたことのある、ソフィア・イーストマンの手紙のなかにも、われわれは、つぎのごとくかかれていますの指摘することができると。

……たれでも、ここにしばらくいたなら、ここが気に入る、去るのがいやになって、このアッソシエーションにはいるにきまってるわ……<sup>20)</sup>

これらをよむと、出て行くひとなどありそうにもおもわれぬ。それでは、出て行くひとは、はたして、ひとりもいなかったか、といえは、そうでもなかったのである。たとえば、ワレン・バートン (Warren Burton) というひとが、すでに、一八四一年七月一六日の晩に、ここを出て行っている。そのことは、ホーソンがその翌々日、すなわち、一八日に、デビッド・マック (David Mack) というひとにかいている手紙によって、われわれは、これを知ることができる。こころみに引けば、つぎのごとくである。

おそらく、あなたはバートン氏がブルック・ファームを去ったことを、まだ、きいていないでしょう。それは一昨日の夜のこと

とでした。それは、まったく、きのどくな、できごとでした。……<sup>21)</sup>

それでは、それは、いかなる事情の下におこったのであろうか。それについて、ホーソンは、ただ「あなは、おそらく、リブレイ氏から、ここここにいたった事情についてお知りになるでしょう」といつているだけである。それで、わたくしは、いま、ここに、それをあきらかにすることが、できない。しかし、出て行くひとがあった、ということ、あきらかなところでなければならぬ。それを否定することはできない。それにしても、このできごとがおきたのは、いま、われわれが問題としておるときよりは、すこしまえのことである。そこには、時間的のずれがある。それで、そのころには出て行くひとがあったとしても、それだからといって、それが、その後、いまわれわれが問題としておるころに出て行くひとがないということをお否定する材料とは、ならないのではないか、といわれるかも知れない。そういわれば、それまでのことかもしれない。それでは、いまわれわれが問題としておる時代には、出て行くひとが、いなかっただと、はたして、いうことができるか、と、いえば、そうはいかないのである。出てゆくひとがいなかつたところではない。ホーソンそのひとが出て行っている。ホーソンは一八四一年の秋、ブルック・ファームを去つたのである。ブルック・ファームにおいて、かれがその日記に最後の記入をしたのは実に、一〇月二七日のことであつた。そして、ホーソンが去つたことは、ひとり、ひとりのひとが去つたというだけにとどまらない。そのことはブルック・ファームにひとつの大きなくげを投じたにちがいない。それは想像するにたたくないところである。しかし、それにもまして大きな問題は、ホーソンが去るにいたつた事情でなければならぬ。そこには、ひとり、ブルック・ファームだけでなく、およそこのようなコンミュニティーそのものの核心にふれるものが秘められている。そうかんがえられる。すくなくとも、わたくしには、そうかんがえられる。そ

れだけに、わたくしには、それをあきらかにすることは、かならずしも、いみのないことではないように、おもわれる。だから、わたくしは、ここに、しばらく、それについて、うかがうところあるであらう。

ホーソンが、いかにリプレイのコミュニティーの理想に共鳴したかは、われわれのすでにしるしたところである。かれが、いかにその生活よろこびをみいだしたかは、われわれのすでにあきらかにしたところである。しかるに、そのかれが、わずか半年あまりにして、去っていったのである。そこには重大なる事情がなければならぬはずである。では、その事情はいかなるものか。なにがかれをそうさせたか。わたくしは、ここに、それを、かれみずからをして、かたらしめることにしよう。

一八四一年の春、四月一二日にブルック・ファームに入ったホーソンが、翌日さつそく、最愛のいいなづけのソフィア・ピーボディにかきあぐった手紙は、実につぎのごときことばではじまっている。

わたしのもっともいとしいひとよ (Ownest love)

あなたのあわれなおつとは、ここ、北極のパラダイスにいます。……<sup>22)</sup>

そして、その後しばらくは、かれは、ピーボディはもとより、他のひとびとにも、しばしば、書信をよせて、そこにおけるじぶんの生活をつたへ、じぶんの労働についてかたっている。そして、そこには、いかにかれが、その生活によるごびをみいだし、その労働にほこりをかんでいるかを、うかがわしめないではやまぬものがある。しかるに、六月一日ソフィア・ピーボディによせた手紙のなかには、すでに、つぎのごとくいうにいたっている。

このほくの現在の生活は、ぼくに、ペンとインキに対する厭悪をあたえると、ぼくは、かんがえる。それは税関で経験したよ

りもはなほだしい。……黄金の鉱山(こや)しをさす(訳者註)で、労働している最中、または、はげしい一日の労働の後、ほくのたましいは、紙の上にふりそそがれることを、頑強にこぼむ。あのいとわしい黄金の山め!……あらゆるにくむべき場所のなかで、そいつは最悪のものだ。ありがたい日の照った日の多くをそこでついやしてしまつたかとおもうと、ほくのこころは、いづまでもなごむことがないでしょう。わが、もつともいとしきひとよ(peace)、ひとのたましいはこやしの山の下、あるいは、田畑のうねの中では、ちょうど、貨幣の山の下におけるとおなじように、うづもれて、くちはてるであろう、というのが、ほくの意見なのです。……<sup>25)</sup>

そして、七月一八日づけのデビッド・マックへの手紙のなかでは、こういつている。

われわれの圧迫感(ジャスト)はまったく環境のそれであります。その環境は、かれ(リブレイのこと―訳者註)にも、われわれにも、どうすることもできないものであります。いまずこのファームを去る以外には、この圧迫感からぬけるみちはありません。

―そして、去ることは、われわれの中たれひとり、しようとしていませんでした。そのわけは、(ただいまの、このくわだての成功をリブレイ氏ほど重視してはいませんが)、それでも、われわれは、その失敗がこのコミュニティーの前途にはなほだしく不吉なものとなるであろうと感ずるからであります。わたくし自身としましては、わたくしだけの個人的ないろいろの動機があります。それらの動機の故に、みんなの・ともないだいでいる動機の影響をうけないでも、わたくしは、なお、ことしの一夏の労働の苦役を、たといわたくしがげんに経験したよりもさらにいっそうほねのおれるものであつたとしても、たえしのぶごことをのぞむであります。自然をたのしみ、思索にふけること、きわめてすくなく、なしとげようとのぞんでいろいろのことを犠牲にしたまま、夏がすぎゆくことを、わたくしが、しばしば、なげいたということは、ほんとうのことであります。わたくしが、先週の土曜日にふれたなげきは、そのようなものでした。……

わたくしは事態の前途について、きわめて、悲觀的に、おそらく、絶望的に、いったこととおもいます。この点について、わ



たくしのみるところは、わたくしの精神状態につれて、いくらか、かわります。しかし、ほんとのところをいいますれば、ちかごろ、わたくしは、けっして、希望にもえていません。ですが、わたくしが判断をくだすのは、ブルック・ファームの内部におきたことからではなくて、外部の事情から充分な資金がえられるであろうということ・あるいは・巨額の資金なくしてすすむことに對して実行のできる案を示唆するということ、が、できそうもないということ、からであります。わたくしは、また、たとえ、われわれが土地を買うに足るだけの資金を手にしたとしても、議論の余地のある大きな難点がいくらかあるように感じます。これらのかんがえは、かつてわたくしがのらに出かけるときもっていた熱意と快活を、いくぶん減退させ、リブレイ氏とわれわれみんなの間の誤解の種となっております。かれの熱意は、かれに、究局の成功をうたがうことをゆるしません。そして、かれは、われわれの現在の農耕と企図が、終局においては、わたくしにみえるよりも、より密接に、むすびつくものと、みます。あるいは、そう想像します。しかしながら、わたくしがさきにもべましたとおり、二つのものは関連するところが大きいから、わたくしは、前者を推進することにわたくしの最善の努力をいたしたいと、ねがわざるを得ません。

われわれが、われわれの現在の生活様式についての不満をぶちまけて、リブレイ氏を落胆させることは、急を要することではないということは、わたくしが、いま、のべたところによって、あなたは、おわかりになられたことと、存じます。われわれのそむところは、かれの実験に充分かつ公正な機会をあたえることであります。そして、もし、かれの多くの希望がむなしくなるにいたっても、われわれは、かれに、その失敗を組合員たちの努力と忍耐の不足のせいにする口実を、あたえたくありません。<sup>24)</sup>

また、八月一二日、ブルック・ファームから、ソフィア・ピーボディに出した手紙の中では、つぎのごとくかいてゐる。

税関にいたときでさえ、このような束縛スレーブや疲勞ウツイは経験しなかった。ばくの心情は、もっと、じゆうであった。ああ、もっともいとしきものよ(Oh, belovedest)、労働はこの世の、のろわれたるもの、であり、たれでも、それにふれたら最後、そのかぎ

り、畜生に墮してしまふ。ぼくが貴重な五月月 (five golden months) を牛や馬にかい、ばをやることについてやしたことを、あなたは、称賛にあたいすること、おもいますか？、もっともいとしきものよ (Dearest)、それはちがう。ありがたいことに、ぼくの精神はこやし、しの山にうめられてしまひはしなかった。ぼくは、まだ、ぼくの精神をすくい出そう。いくらかよこされたにはちがいないが、あらいきよめることが、まったくできないということはない。<sup>25)</sup>

そして、おなじく、ソフィア・ビーボディにあててかかれた八月二日づけの手紙からは、つぎのごときことばを、ひろいあげることができる。

…… 先便以後、ぼくはほしくさぐくりをやった。そして、ぼくの、のこりのしごと、はおそらくやさしいでしょう。それにしても、ぼくが、娯楽や、科学のたのしみに余暇レジャーを利用することができるようになるのは、ずいぶんときさきのことでしょう。…… いとしい妻よ (Dearest wife)、リブレイ氏がかれのコミュニチーをこの農場にひらくことに成功するかどうかということ、は、きわめて疑問です。かれはエリス氏 (Mr. Ellis) 地主 (訳者註) と相談をまとめることができなかった。二人は、はなせばはなすほど、とりきめることから、とおさかるように、おもわれた。あなたとぼくは、じぶんたちで、他の計画をたてなければならぬ。なぜなら、神がここでわれわれにホームをあたえようとしたまう兆を、ぼくは、ほとんど、みることができないから。…… ぼくは、われわれはコミュニチーにたよってはならないという確信を、ますます、つよめております。せられねばならないことは、なんでも、あなたのおつとみづからの、ひとりの力によって、なされねばならない。もっともいとしきものよ (Most beloved)、来春までにわれわれのホームができるということが、絶対的に確実でないかぎり、ぼくは冬中ここにのこらないでしょう。その場合は、ぼくはポストンにかえりましょう。……<sup>26)</sup>

さらに、九月三日には、かれは郷里のサレム (Salem) からソフィア・ビーボディに、こう、かいている。

いとあまきものよ (Sweetest)、このまえあなたにあってから、もうすいぶんながくたったような気がする。しかし、ぼくは、いつも、あなたのことをおもっている。それでぼくはながらえている。だから、ある意味では、われわれは、まったく、わかれているとは、おもえない。だが、実のところ、ぼくは、ブルック・ファームをはなれてから二〇年もたった、と断ぜざるを得ない。そして、ぼくは、このことを、そこでのぼくの生活が、不自然で、性にあわず・したがって・真実なものでない証拠である、と、おもう。それは、すでに、過去の夢のようにみえる。真実のぼくは、けっして、コンミュニチーのなかまではなかった。そこにあつたものは、かりのすがたの幽霊 (a spectral Appearance) で、それが、よあけに、つのぶえを吹き、うしのちちをしほり、じゃがいもをほり、ほしくさをかきあつめ、口に照らされて、あせみずながして、ほねおりをし、そして、かたじけなくも、ぼくの名をのべてくれたのだ。だが、まどわされてはいけないよ、わがごろのほとよ (Dove of thy heart)。この幽霊はあなたのおとではなかったのだよ。それにもかかわらず、あなたのおとの手が、すぎしことしの夏に、日にやけて、あれ、そのため、多くのひとが、かれは、やはり、さきに行った・幽霊の・つのぶえ・ちもしほり・じゃがいもほり、そして、ほしくさをかき、であったと、信じこんでいる。しかし、そのようなひとたちは、実体と影を区別することができない (But such a people do not know a reality from a shadow)。<sup>27)</sup>

サレムよりブルック・ファームにかえて、ホーソンは、九月二三日、またまた、ソフィア・ピーボディに手紙をかく。そして、その中で、つぎのようなことをいう。

もっともいとあまきものよ (Dearest Love)、あなたのおととは、また、ここにいる。そして、このおかしなコンミュニチー (this queer community) の生活だ、徐々に、順応しつつある。かれはこのコンミュニチーからはなれること生涯のなかばほどにもなるようなおもいがする。——それほど、かれは、このところの精神と風習からかけはなれてしまっている。……  
もっとも愛されてあるものよ (Belovest)。ぼくはこの農場にとどまっている間に、グラントファーザース・ライブラリー

(Grandfather's Library)の他の一巻をかきあげることができるかどうか、うたがわしい。ぼくは完全にひとりであるというきもちがしない。完全にひとりであるということは、これまで、いつも、ぼくの・なにかをつくり出す力にとって、必要欠くべからざるものであったものである。たれもぼくのへ、やに關入するものはない。それは事実だ。しかし、それでも、なお、ぼくは、おちついた気になれないのだ。ここには安定したものは一つもない。——なにかも、やっと、これから、というところだ(everything is beginning, but to arrange itself)——そして、あなたのおっとは、かれ自身の思想のほかは、なにものにも、われ関せず焉をきめこんでいるふうなのだが、それでも、なお、かれは、かれの周囲のさわざにまぎこまれざるを得ない。ぼくのころは虚脱をほっしらない。ぼくは観察しなければならぬ。ぼくは、かんがえなければならぬ。ぼくは、感じなければならぬ。そして、ぼくは、将来つくりなされるかも知れぬものをちりちりとみるだけで満足しなければならぬ。おそらく、目下のところ、ぼくは、文学のしごとにうちこむことができないでいる方が、かえってよいのかも知れない。ぼくの、肉体の労働と精神の労働の間に、ながい間隔があるのは、よいことであろう。ぼくは、一月のはじめから先は、よりよい目的にむかってはたらくであろう。それまでのところは、これらのひとびとと、かれらの事業をあらたなる観点の下でながめるであろう。そして、ぼくは、おそらく、あなたとぼくが、かれらと運命をとにもする要ありやいなやを、決定することができようであろう。<sup>28)</sup>

それから三日後、九月二五日、ホーソンは、また、ソフィア・ビーボデイに、手紙をかいている。そして、そこに、われわれは、断乎として、つぎのごとくいう、かれをみる。

……ともかく、たしかなことが一つある。——それは、ぼくには、冬をここで過ごすことが、できもしないし、また、そのつもりもない、ということである。なんらかの文学的な労作をなしとげねばならないとするかぎり、まったく、時間をすてることになつてしまふだろう。<sup>29)</sup>

ホーソンがこの手紙をかいてから四日後、すなわち、九月二九日、かれは、財務係にえらばれた。そのことは、

われわれのすでにみたところである。だが、このことも、かれのかがえかたをかえることができなかった。それは、そのおなじ日の日づけをもつ、かれからソフィア・ピーボディへの手紙の中の、つぎのことばによつても、あきらかでなければならぬであらう。

もっともいとしき愛よ(Darkest Love)、あなたのおつとは、昨夜、二つの高い役にえらばれた——すなわち、ブルック・ファーム財団評議員、および、財務委員会議長だ！……

もっとも愛されてあるものよ(Belovedest)、ぼくがこれらの尊い役についたからといって、ぼくが、ここに永久にとどまるといふ問題がきまつたわけでは、けつして、ない。ぼくはリブレイ氏に、ぼくが冬をこの農場ですごすことができないということ、そして、春にかえてくるかどうかかわからないということ、を、はなした<sup>30</sup>。

このようにして、ホーソンは、ブルック・ファームを去る。いま、ホーソンをしてブルック・ファームを去るにいらしめた事由を要約すれば、つぎの三点に帰するであらう。一、労働に対する厭悪、二、共同生活から来る束縛への不満、および、三、財政難より生じたコミュニチーの成功についての懷疑。しかるに、これらの事由は、いづれも、ブルック・ファームにとつては、その根底をゆるがすに足るゆゆしい問題である。したがつて、これらの事由の因がブルック・ファームにあれば、ブルック・ファームの運命は、まさに風前のともしびといわねばならない。順調なあゆみをほころがごときは、自己陶醉・自己偽瞞もはなはだしきもの、噴火山上の乱舞以外のなにものももあるまい。しかしながら、一と二に関するかぎり、事由の因はブルック・ファームにあるというより、むしろ、ホーソンの側にあるとみることでもできるであらう。したがつて、一と二に関するかぎり、それは、すくなくとも、ブルック・ファームにおいては、いま、問題としてとりあげなくてよからう。しかし、三は事情がちがう。そ

の因をホトソンにのみ帰するわけにはいかない。そこで、それが問題となりねばならない。だから、わたくしは、これから、しばらく、それについて考察をこころみであらう。 (未完)

- (1) 経済論叢・第八十六巻第二・四号、同・第八十七巻・第一号
- (2) 拙稿「ブルック・ファーム・五」(経済論叢・第八十七巻・第一号)
- (3) O. B. Frothingham, *George Ripley*, Boston: Houghton Mifflin Company, 1882, p. 313,
- (4) 経済論叢・第八十六巻第四号
- (5) Elizabeth P. Peabody, "Plan of the West Roxbury Community," *The Dial*, II, January, 1842, 382. (to be found in Page 72 of *The Autobiography of Brook Farm* edited by Henry Sams (Englwood Clifles, New Jersey, Prentice-Hall, Inc., 1958).)
- (6) F. B. Sanborn, *A Bronson Alcott, His Life and Philosophy*, 2 volumes, Boston: Roberts, 1893, II, p. 383.
- (7) Henry W. Sams, *Autobiography of Brook Farm*, Englwood Clifles, New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1958, p. 80.  
これらのたてものについては既掲(経済論叢・第八十六巻第二号)・拙稿「ブルック・ファーム・一参照
- (8) この手紙の目附はただ「十曜の夜」となっているだけで、年月日がない。しかし、リンゼイ・スウィフト(Lindsay Swift)氏は「一八四二年の夏以前でないことはたしかである」(註⑨)にあげた文献の七七頁)という。しばらく、それだとならう。
- (9) Lindsay Swift, *Brook Farm, Its Members, Scholars, and Visitors*, New York: The Macmillan Company, 1900, p. 80.
- (10) Charles Lane, "Brook Farm," *The Dial*, IV (January, 1844) 355, (to be found in p. 90 of the above mentioned *Autobiography of Brook Farm*.)
- (11) 拙稿「ブルック・ファーム・五」(経済論叢・第八十七巻・第一号)
- (12) Henry W. Sams, *ibid.*, p. 111.
- (13) 拙稿「ブルック・ファーム・二」(経済論叢・第八十六巻・第二号)
- (14) see 5) (15) see 10) (Henry W. Sams, *ibid.*, pp. 87-90)

- (16) see 7)                      (17) see 7) p. 81.
- (18) Arthur Sumner, "A Boy's Recollections of Brook Farm," *New England Magazine*, X. New Series (March-August, 1894) 309, (to be found in pp. 238-239 of the above mentioned *Autobiography of Brook Farm*.)
- (19) John Van Der Zee Sears, *My Friends at Brook Farm*. (New York: Desmond Fitzgerald, 1912), pp. 59-60.
- (20) see 7)
- (21) Manning Hawthorne, "Hawthorne and Utopian Socialism," *The New England Quarterly* XII (1939), 728 (Henry W. Sams, *ibid.*, p. 24)
- (22) *ibid.*, p. 12.                      (23) *ibid.* 21. .
- (24) Manning Hawthorne, *ibid.*, 727 (Henry W. Sams, *ibid.*, pp. 22-23)
- (25) *ibid.*, p. 30.                      (26) *ibid.*, p. 31-32.
- (27) *ibid.*, p. 34.                      (28) *ibid.*, pp. 34-35.
- (29) *ibid.*, p. 37.                      (30) *ibid.*, pp. 43-44.